私の近松の旅

神戸女子大学教授　信多　純一

大学二年の頃、近松研究を志して以来凡そ五十年、近松の没した年齢と年も等しくなりました。思えば永い近松を尋ねる旅だったといえます。近松を知る大事な過程として、太夫研究、彼と関わりの深い宇治加賀掾の研究がその始めでした。

昭和三十二年、「解釈と鑑賞」誌が戦後初めて近松特集誌を編み、当時院生の私もこれに「近松の伝記―加賀掾・藤十郎・義太夫との関係を中心として」を執筆しましたが、これが後の私の研究に大きい影響を落しました。爾来近松の一生を追うことになり、一往先年完成した岩波書店版『近松全集』第十七

巻「伝記資料」の編纂で結実をみました。

昭和三十四年発行の森修氏『近松門左衛門』（三一書房）は名著ですが、この手伝いを私もしまして、杉森家を共に訪い、杉森系譜の他、未紹介であった親類書などを調査することが出来ました。所は芦原であり時はお盆時分、柿の葉に盛られた鮨をよばれた記憶が今に鮮明です。

こうして福井方面への近松を尋ねる旅が始まったのですが、勤務先の大阪大学国文科旅行で、吉江にもまいりました。その川や周囲の山のたたずまいに、幼時の近松を想ったことです。また、こうした平穏な地から京の繁華の地に身を転じた信盛の境遇の変化は、その心情にいか程の大きい刺戟を与えたことであろうと。

鯖江にはその後『近松全集』伝記編のために一人で訪ね、藩政資料を見せてもらったりしました。丁度近松の展示もしておられた時であったと記憶しています。

福井の街には、岩佐又兵衛の展覧会にかけて参りました。これも直接的ではありませんが、近松と深いつながりがある旅です。

『奇想の系譜』など名著のある美術史家辻惟雄氏に誘われ、熱海ＭＯＡ美術館に又兵衛画『上瑠璃』絵巻の調査に山に籠ったことがあります。これは京都書院から、複製・翻刻そして辻氏・私などの解説付きで刊行されましたが、これを皮切りに私は『浄瑠璃御前物語』（十二段草子）の本格的研究に進みます。以来又兵衛の画業は常に注目しており、訪福に至ったのです。最近私は岩波新日本古典文学大系の『古浄瑠璃・説経集』で『浄瑠璃御前物語』を担当し、底本にＭＯＡ本を採用しました。従来は無視されていた本文なのですが、『浄瑠璃』本然の姿をより多く残す本文と考えてのことでした。近松はこの『浄瑠璃』に始まる浄瑠璃作者であり、この作自体をもとに『十二段』その他の作品をものしています。

初めに「近松の伝記」に挑んだことが大きい意味を持っていたことを記しま

した。この時の調査行が、後々人の縁、物の縁となって未だに関わりが網の目のようにつながります。

近松の仏教の師と言われていた江戸の傑僧浄厳（契沖の師でもある）を河内の寺に訪ねて、近松当時の宗教界・思想界の研究につながったり、同志の三井淳生画伯と知り合い仏教版画の収集に向かったりしましたが、先般近松自筆の『傾城反魂香』草稿の所在を教えてもらったり、持主の所に連れていって下さった古書肆の主人などとのつながりも、そうした人の縁の上に築かれているのです。

こうした旅の道連れとの機縁は、私を近松の歌舞伎の代表作『けいせい仏の原』上本・『けいせい七堂伽藍』上本の入手や、最近また『今源氏六十帖』それぞれ名前は判っていましたが、所在が明らかでなかった稀本の入手といった幸運に導いてくれます。

私の近松探索の旅の終りに、このように〝もの〟で果報を与えてくれている

のは、近松さんの褒美なのかと自惚れたりしますが、しかし本当は、〝もの〟ではなく彼が示してくれている作品の心、私達を打つ心こそ、私だけでなく皆人への贈り物であると思います。そして私の作品の心を探る旅はまだ続くようです。

信多 純一　しのだ　じゅんいち

1931年大阪生まれ。京都大学文学部国語国文科卒業、同大学院文学研究科博士課程単位修得退学。松蔭短期大学・奈良女子大学・大阪大学を経て、現在、神戸女子大学教授、大阪大学名誉教授。

主な著書に『のろまそろま狂言集成』（大学堂書店、毎日出版文化賞特別賞〈1975〉）、『絵巻　上瑠璃』（京都書院）、『近松門左衛門集』（新潮日本古典集成）、『近松の世界』（平凡社、角川源義賞〈1992〉）、『にせ物語絵』（平凡社）、『古浄瑠璃・説経集』（岩波新日本古典文学大系）などがある。

文学博士、1999年紫綬褒章受賞。